

2020/11/22

ヨハネの福音書 講解メッセージ②⑤

『自由について』 ヨハネ 8:20-32

## ✠ 自分の罪の中で死ぬとは

「イエスは宮で教えられたとき、献金箱のある所でこのことを話された。しかし、だれもイエスを捕らえなかった。イエスの時がまだ来ていなかったからである。イエスはまた彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。」(ヨハネ 8:20-21)

「自分の罪の中で死にます」と言われると、嘘などの自分の悪事を思い出し、私のことではないかと恐れる人もいることでしょう。しかし、それは自分の物差しで聖書を読んでいるからです。聖書のことばの本当の意味は、聖書のことばで理解しなければなりません。自分の価値観で読むと、誤った理解をしてしまいます。

この御言葉の意味を知るためには、人とはどのような存在かという前提が大切です。創世記 2:7 を読むと、神は土地のちりで人を形作り、そこにいのちの息(霊・魂)を吹き込んで、人は生きるようになったと記されています。これは、肉体と魂が与えられ、そこに精神(意識)が生まれたことを意味します。哲学は「人とは何か」を問い続け、人が自分という存在に気づくのは何かを意識したときである、つまり「人間とは意識である」という結論にたどりつきました。人とは、体と魂によって生じた意識である、つまり、哲学が長い時間をかけてたどりついた答えが、聖書には初めから書かれていたわけです。

この意識が生じるためには、私たちの中に普遍的な運動が必要です。聖書の言葉によって理解するなら、私たちの中にある神のいのち(魂)という普遍的な運動に、体が持ち込むこの世の情報がぶつかって意識が生じる、と理解できます。この意識こそが人なのです。つまり、人とは、実体を指すのではなく、神のいのちと体によって存在する精神です。このことを、魂と体から成る総合という言い方をします。人とは生かされている存在なのです。

さて、私たちの体は、悪魔の仕業によって死が入り込んだために、朽ちるものになりました。体が朽ちると意識は存在できません。そのため、人間は肉体の死によって滅びます。ですから、私たちが生き続けるためには、新しいからだが必要です。聖書はそれを永遠のいのち、あるいは霊のからだと呼んでいます。

救いとは、この霊のからだを着せてもらうことです。霊のからだは朽ちることがなく、永遠です。そして、霊のからだを持ち込むのは、神の国の情報です。私たちはすでにそれを着せていただいているので、肉のからだで見たことのないものを信じることができるのです。イエス・キリストは、「信じている者は永遠のいのちを持っている」と言われました。永遠のいのちはこれから手にするものではありません。すでに永遠のいのちを持っていたので、福

音に触れることで、救いを意識することができたのです。どのようにして永遠のいのちを持っていたのか、それは潜在意識の中で魂がイエス様の呼びかけに応答して救われていたのだと考えられます。イエス様は私たちに伝道することを教え、それを「刈り取り」と呼んでおられます。伝道とは人々を納得させるように福音を語るのではなく、すでにイエス様が救った人を収穫することだからです。

では、「自分の罪の中で死ぬ」とは何を指すのでしょうか。聖書は次のように教えています。

「御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかった  
ので、すでにさばかれています。」(ヨハネ 3:18)

つまり、神の御子イエス・キリストを信じないことが、「自分の罪の中で死ぬ」ということです。自分の経験や考えで御言葉を判断せず、聖書を通して理解しましょう。

### ✠ 神の言葉を食べよ(真実は神にしかわからない)

「そこで、ユダヤ人たちは言った。「あの人は『わたしが行く所に、あなたがたは来ることができない』と言うが、自殺するつもりなのか。」それでイエスは彼らに言われた。「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」

(ヨハネ 8:22-24)

ユダヤ人たちは、イエス様のことばを聞きましたが、まったく理解できませんでした。人のものさしで神を知ることはできないからです。

イエス様が、「あなたがたが来たのは下からであり」と言っているのは、「あなたがたは死の世界にいる」ということです。そして、「もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ」とは、「わたしが差し出す御手をつかまなければ」あるいは「応答しなければ」と言い換えることができます。この時、イエス様はご自分を「わたしのこと」と呼んでおられますが、これはヘブル語の「わたしはある(エゴーエイミ)」という神の称号が使われました。イエス様をご自分を神と等しくしたことで、ユダヤ人たちは激怒しました。

この「わたしはあるという者である」とは、哲学においても衝撃的な言葉です。哲学は、初めに私たちの「存在」について考えました。人は絶えず変化していて、今の私は次の瞬間には存在していません。哲学では、「存在する」とは止まっていることなのです。つまり、私たちは存在していないということになります。私たちが存在するようになるために、動かないものにつかまるしかありません。それが神です。神がご自分を指して「わたしは存在するもの」(わたしはある)と言われたことは、哲学に対する答えにもなりました。

「そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれですか。」イエスは言われた。「それは初めからわたしがあなたがたに話そうとしていることです。」(ヨハネ 8:25)

イエス様とユダヤ人たちの話がかみ合わないのは、彼らが、神の言葉を自分の理性で納得しようとするからです。私たちも同じです。「納得したら信じよう」という態度では、イエス様と話がかみ合うことはありません。私たちはこの世界の物差ししか持っていません。しかし、神は霊なので、この世の物差しで測ることはできません。この世の物差しで神を測ろうとする限り、いつまでも納得できず、いつまで経っても話は平行線です。

### ✂ 信じる戦いをせよ(納得することが真実ではない)

「わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わした方は真実であって、わたしはその方から聞いたことをそのまま世に告げるのです。」彼らは、イエスが父のことを語っておられたことを悟らなかった。」(ヨハネ 8:26-27)

イエス様が弟子たちに「さばくべきことがある」と言ったのは、「注意すべき点がある、正しい判別を教える必要がある」という意味です。しかし、弟子たちはイエス様の言葉を理解することができず、つまずきました。私たちも、納得しようと思って聖書を読むと、この弟子たちのようにつまずくことになります。

「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。わたしがあなたがたに話したことばは、霊であり、またいのちです。」(ヨハネ 6:63)

肉とは、人間の理性・知恵のことです。霊を肉で理解することはできません。

私たちは、自分を物差しにして、自分の創造と違うことに対しては「おかしい」と言い張ります。「神がいるなら、なぜ戦争が起こるのか」というように、「神がいるなら、なぜ…」と考えるのは、「神とはこういう方だ」とあなたが想像している神とは違ったということです。想像は事実ではありません。実際の神について知るには、神を知っている人から聞くしかありません。私たちがつまずくのは、自分の枠の中にとどまって、神の言葉を信じようとしなからずです。だから、自由がないのです。自分の枠から飛躍すること、これが信仰です。

アダムとエバが罪を犯したとき、神は二人をエデンの園から追放なさいました。これは、神の罰ではありません。神を認識できないようにして、信仰によって私たちを救うためです。人は神がいることを証明できないし、いないことも証明できません。神様は、神のことは信仰でしかわからないようにして、神を否定できないようにしたのです。これが神の深い知恵です。

信じるとは神の前にへりくだることです。人は信仰でしか神を知り得ないし、信仰でしか救われません。人が傲慢になることがないように、神はあえてそういう道を用意したのです。

## ✠ いやしと自由(へりくだって神の言葉にとどまる)

「イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行うからです。」イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。そこでイエスは、その信じたユダヤ人たちに言われた。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」(ヨハネ 8:28-32)

イエス様は「わたしが復活するのを見たら、わたしが何者であるかを知るようになる」と言われました。では、実際にイエス様が語られたとおりに知った彼らは何をしたのでしょうか。迫害です。彼らは、イエス様を信じませんでした。知ることと納得することは別であり、また、知ることと信じることは別なのです。信じるとはへりくだることです。神を愛することです。彼らは、イエスはキリストだったと知りましたが、へりくだることをせず、信じようとしませんでした。しかし、もし私たちが本当にイエス様のことばにとどまるなら、私たちは自由になると、イエス様は言われました。自由とは何でしょうか。信じた人々は、どのような自由を得たのでしょうか。

神様が、私たちは自由でないと言っておられるのは、私たちが人の目の奴隷になっているからです。人の目の奴隷とは、人が自分をどう思っているかで自分のセルフイメージを作り、それに従って生きている状態のことです。人の目の奴隷になるのは、私たちが自分の真実な姿を知らないからです。イエス・キリストは、ご自分が何者であるかを知っていたので、自分について「だれの証言も必要とされなかった」(ヨハネ 2:25)とあります。

私たちが自由を手にする方法は、自分が何者か、その真実な姿を知ることです。それは、あなたの真実な姿を知っている方、あなたを造り、あなたの土台であるイエス・キリストから聞くしかありません。こうして私たちは承認欲求から解放され、自由に生きられるのです。

私たちは、キリストの体の一部であって、神と同じ永遠のいのちを持っています。私たちは神の部分であり、私が生きているのではなく、キリストが生きておられるのです。これが私たちの真実な姿です。つまり、神はあなたといつも一緒におられるので、あなたを見捨てることができません。だからあなたは「高価で尊い」と言われるのです。これが真実な姿なので、もう人の証言など必要ありません。

「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。」(イザヤ 43:4)  
「彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。」(イザヤ 63:9)

これがあなたの真実な姿です。このことを知らずにいた私たちは、自分についてよい証言を得たり、人からほめられたりしようとし、安心を得ようとする生き方をしてきました。しかし、神の言葉にとどまるなら、あなたは真実を知り、人からの称賛を求める必要はなくなります。

あなたは高価で尊いと言われても、なぜこんな私が…と戸惑うかもしれませんが、神の言葉は納得するものではなく、信じるものです。神の言葉を真剣に信じて、真実な自分の姿を知り、まことの平安を得ましょう。それがあなたを自由にします。